

司馬遼太郎
全講演
[3]

1985-1988 (I)

朝日文庫

し ばりようた ろうぜんこうえん
司馬遼太郎全講演 [3]
1985-1988 (I)

朝日文庫

2003年11月30日 第1刷発行

著 者 司馬遼太郎

発行者 柴野次郎

発行所 朝日新聞社

〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2

電話 03 (3545) 0131 (代表)

編集＝書籍編集部 販売＝出版販売部

振替 00190-0-155414

印刷製本 凸版印刷株式会社

©Midori Fukuda 2000

Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります

ISBN4-02-264320-X

全講演 [3]

江苏工业学院图书馆

1955—1988

司馬遼太郎
藏书章

朝日文庫

本書は朝日新聞社より刊行された『司馬遼太郎
全講演 第2巻』（二〇〇〇年八月刊）中、一九
八五年～一九八八年七月までの講演に「人間と
いう『商売』の話」（一九八八年）を追加収録
し、まとめたものです。

目 次

一九八五年

松陰の松下村塾に見る「教育とは何か」 11

『葉の花の沖』について 36

時代を超えた竜馬の魅力 51

司馬さんの控え室① 高知の空と僕の竜馬 85

小村寿太郎の悩み 87

一九八六年

義経と静御前 107

奄美大島と日本の文化 124

近松門左衛門の世界 139

司馬さんの控え室② 上方花舞台と司馬さんの詞 153

「文明の窓口」としての朝鮮 155

「見る」という話 174

一九八七年

文学から見た日本歴史 221

三河と宗教 248

偉大な江戸時代 263

東北の巨人たち 278

細川家と肥後もっこす 292

裸眼で見る「文明と文化」 308

司馬さんの控え室③ 「文明と文化」を語る理由 323

言葉の文明 325

日本人のスピーチ 340

一九八八年 (I)

横浜のダンディズム 357

司馬さんの控え室④ 直木賞選考会での司馬さん 371

人間という「商売」の話 373

敗者たちの戊辰戦争 396

解説 司馬文学の鍵——出久根達郎

411

司馬遼太郎全講演
[3]

1
9
8
5
|
1
9
8
8
(I)

一九八五年（昭和六十）

【一九八五年】

金大中・韓国大統領候補、米国から二年ぶりに帰国（二月）

田中角栄元首相が脳梗塞で入院、「田中支配」の終焉（二月）

茨城県つくば市で科学万博開催（三月―九月）

豊田商事会長がマスコミの目前で刺殺される（六月）

日航機が山中に墜落、五百二十人が死亡（八月）

ブラザ合意が成立、以後、急激な円高に（九月）

ソ連共産党中央委総会、二十四年ぶりに綱領を修正（十月）

【司馬遼太郎八二歳】

アメリカ東海岸に取材旅行（六月―七月）

韓国・済州島に取材旅行（十月―十一月、十一月―十二月）

松陰の松下村塾に見る「教育とは何か」

人間は動物の中でもいちばん一人前になるのが遅い動物ですね。

シカならずぐ歩きだす。

タカも一定の期間だけ母親が餌えさを持ってきて、飛ぶ稽古をさせる。稽古が終われば、もう母親は突き放してしまう。その間に、母親の教育上のいわば「刷り込み」が行われます。

人間の子供の場合、小学校の六年生ぐらいまでは、やはり自分では飯が食えないという恐怖心があります。

昔の子供だと栄養が不足していて、頼りなくて、なおさらでした。

一人で飯が食えるなら人間の子供はもっと生意気になると思うのですが、とても親元を離れられないという、動物的な怯えがある。その間に「刷り込み」が行われます。

人間の子供の成長は、時代によってちがいますね。

いまの子の成長はずいぶん早く、中学一年生くらいだと立派な体格をしています。まだ子供だと思っていたのに、どんどん体だけ大きくなる。

「退学してアルバイトをするぞ」

などと言いだす。

生物学的にみれば、もう道路工事の仕事だってできる。

おれはいつでも自分で飯が食えるということが、校内暴力などいろいろな問題の基本的な原因になっています。

さらに体が大人なのに、一日六時限ですか、学校教育のなかに閉じ込められる。これが小学生だと先生のわけのわからない話を聞いても、動物的な恐怖がありますからじつと我慢する。

中学生だと動物的な恐怖が薄らいでいますから、拘束されていることがとてもつらい。子供は忍従しています。

先生の言うことを聞かないといけない。授業中はおとなしくしなきゃいけない。先生も言い、親も言う。社会も言う、国家が言う。子供は重い抑圧を感じていて、それにさまたまな形で反発して問題になっている。

もうひとつ原因があります。

私が子供のころは昭和初年ですが、この時代の農業人口は全体のざっと八割ぐらいを占めていたと思います。

あとの二割が東京や大阪に出て都市生活をしていたのですが、これがいまは逆転してあります。農村人口は激減し、人は都市に出ていく。

しかし、都市に出ていくということには、たしかに意味があるんです。少なくとも戦前の、昭和初年の人ならその意味をよく知っています。

都市とは才能の市なのです。

才能の目方をはかる市場である。才能のある者を残し、才能のある者に収入を与え、生活を与える。農村はもうちよつとのんびりしていました。

才能というのは、かなり広い意味で使っています。

洋服屋に修業に行き、器用な人なら二十歳を過ぎたあたりで一本立ちできます。これも才能ですね。

ものを売り買いできる才能を持っている人も貴重です。ものを売るということは難しいことですから。

さてなんにもない人は入学試験でも一所懸命受けることになります。勉強するしか能のない子供にとっては、東京大学でもそうですし、昔の大阪師範学校でもそうですね。しかるべき学校に入ることと就職できる。そういう具合に、二割の人が都市に出ていっ

た。

せいぜい二割だからよかった。

すべての人間に対して日本一のコックになれといっても無理でしょう。

異様に敏感な舌を持ち、異様に器用な人だけがコックになれる。才能を持つ人のほうが圧倒的に少ないのです。普通の健康的な人間の多くは、農村にくるまれて暮らしていません。

もちろん働くことは働く。しかしどこか昔の農村はのんきでした。

現在の小学生や中学生を見て非常に痛ましく思います。

今日の会合は二十一世紀の教育を考えるとということであります。しかし二十一世紀の子供がどうなっているかなどと、想像する必要はありませんね。

昭和初年の子供が見たら、震え上がるような社会に、いまの子供たちはいます。日本中の子供たちが才能の市で競争させられている。

本来向いていない人が多いのに、向いているように仕込みをして、今日の世界に冠たる技術国家をつくりあげた。

人間のいちばん人間らしい状態にあるのが子供なんですから、いたわりがあったほうがいい。政府にも教育者にも、むろん親にもあったほうがいい。

日本の子供たちは人類がかつて経験したことのない社会にせきたてられている。なん

とも哀れな感じが私にはしてなりません。

少し話を変えます。私は子供のときからの魚嫌いですし、釣りもしない。およそ魚とは無縁の人間ですが、一時期、漁村に強い関心がありました。

漁村はおもしろいですね。

人間の教育の原形を考えると、漁村はそのひとつの場であるかもしれませぬ。

十五、六年前ですが、明石の漁業組合長を訪ねたことがあります。戦後に漁業組合をつくろうとして、ずいぶん苦労したそうですね。

漁民がそんな高級な組合なんかできるかという疑問、反対の声が強かった。ある人はこう言ったそうです。

「羽織を着た人を呼んでこなくては、仕方ないのところがいますか」

いい表現ですね。羽織を着た人とは、農村の庄屋の手代のことでした。

漁民は沖へ出て、魚を取る。取れなかったらおしまいという仕事です。

農民はどうでしょう。極端な言い方をすれば、稲も大根も自然に育つ。いろいろ手間はかかりますが、基本的に農民は、作物の成長の介護をしている。魚を取らなくては食べへてはゆけない漁民に比べ、やや暇があります。

その暇に何をするかというと、村の人事に明け暮れております。

村長をだれにする、村会議員をだれにするといったことから、人の噂話に至るまでが